

3-1-1 〈参考〉『青年同盟の任務』の該当箇所

「自分を守りぬき、新しい社会をつくりだすことができるということを、労働者と農民が証明したとき、そこでは、新しい共産主義的教育、搾取者にたいする闘争の教育、プロレタリアートと同盟し、利己主義者や小所有者に反対し、私は自分の利潤をえるために努力しているので、ほかのことなどすこしも知ったことではない、とかたる心理と習慣に反対しての教育も、はじまったのである。

これが、若い青年層は共産主義をどうまなぶか、という問題にたいする答である。

その学習、教育、陶冶の一步一步を、古い搾取社会にたいするプロレタリアと勤労者とのたえまない闘争に結びつけてこそ、彼らははじめて共産主義をまなぶことができる。人々がわれわれにむかって倫理を論ずるとき、われわれはこういう。共産主義者にとって全倫理は、この結束した連帯的規律と搾取者にたいする自覚した大衆闘争とに尽きる、われわれは永遠の倫理を信ぜず、倫理についてのあらゆる語り話の欺瞞を暴露する。倫理は、人間社会をいっそうたかく引きあげ、労働を搾取から解放する目的に奉仕するものである、と。

これを実現するには、ブルジョアジーとの規律ある必死の闘争の環境のもとで、自覚した人間に変わりはじめた青年の世代が必要である。彼らはこの闘争のなかで、真の共産主義者を育てあげる。彼らはその学習、陶冶、教育の一步一步をこの闘争に従属させ、結びつけなければならない。共産主義的青年の教育は、彼らにあらゆる種類の甘ったるい言辞や、倫理の規則を提供することであってはならない。教育はそういう点にはない。自分の父母がどんなに地主や資本家の圧制のもとで暮してきたかを人々が知ったとき、搾取者にたいする闘争をはじめめるものに襲いかかる苦難を自分で味わったとき、たたかいとった成果をまもるためにこの闘争をつづけることがどれほど多くの犠牲を要するか、地主や資本家がどんなに狂暴な敵であるかを知ったとき、——これらの人々は、そういう環境のもとで教育されて共産主義者になるのである。共産主義的倫理の基礎にあるものは、共産主義を強化し完成するための闘争である。これがまた、共産主義的教育、陶冶、学習の基礎でもある。これが共産主義をどうまなぶかという問題にたいする答である。

もし学習、教育、陶冶が学校のなかだけに閉じこめられ、激しい生活から切りはなされたものであるなら、われわれはそれを信用しないであろう。労働者と農民が依然として地主や資本家に抑圧されているかぎり、学校が依然として地主や資本家の手中にあるかぎり、青年の世代は盲目であり、無知である。だが、われわれの学校は青年に知識の基本をあたえ、自力で共産主義的な見解をつくりあげる能力をあたえ、彼らを教養ある人間に仕立てあげなければならない。われわれの学校は、人々がそこでまなんでいる期間内に、搾取者からの解放をめざす闘争の参加者に彼らを仕立てあげなければならない。青年共産同盟は、その学習、教育、陶冶の一步一步を搾取にたいするすべての勤労者の共同闘争への参加と結びつけるときにだけ、共産主義的な若い世代の同盟というその名称をはずかしめないことになる。なぜなら、諸君がよく知っているように、ロシアが引きつづき唯一の労働者共和国であって、その他の全世界では古いブルジョア制度が存在しているあいだは、われわれは彼らよりも弱く、いつでも新しい攻撃の危険にさらされているからであり、またわれわれが結束と一致協同の精神をまなびとってこそ、われわれは今後の闘争に勝ち、強化し

て、真に不敗となるだろうからである。このように、共産主義者であるということは、青年層全体を組織し、統合し、この闘争のなかで教育と規律の手本をしめすことである。そうするとき、諸君は、共産主義社会という建物の建設に着手し、それを最後までやりとげることができるであろう。

この点を諸君にもっとわかりやすくするために、私は一つの例をあげよう。われわれは共産主義者と自称している。共産主義者とはなにか？ コムニストというのはラテン語である。コムニスとは共同という意味である。共産主義社会というのは、すべてのものが——土地も工場も——共同であり、労働も共同であるという意味である。これが共産主義の意味である。

各人が別々の地所で自分の経営をやっているとしたら、労働は共同でありえようか？ 共同の労働はいきなり作りだせるものではない。そういうことは不可能である。これは、天から降ってくるものではない。これは労働によってかちとり、くるしんで生みだし、作りださなければならないものである。これは闘争の過程で作りだされる。ここでは古い書物は役に立たない。本などを信じるものはだれもないだろう。ここで役にたつのは自分自身の生活体験である。コルチャックとデニキンがシベリアと南部からやってきたとき、農民は彼らに味方した。ボリシェヴィズムは農民の気にいらなかった。ボリシェヴィキは公定価格で穀物を取りあげるからである。しかし、農民がシベリアとウクライナでコルチャックとデニキンの権力を体験したとき、農民は、自分らに選択の余地はないことを知った。資本家のがわにつくか——そうすれば、資本家のために地主の奴隷に売りわたされる——、それとも労働者のあとについていくかのどちらかであった。労働者はなるほど、桃源境を約束しはしないし、諸君に鉄の規律と苦しい闘争のなかでの確固さとを要求するが、しかし諸君を資本家と地主の奴隷制のなかから連れだしてくれる。無知な農民さえ、自分自身の経験にもとづいてそれを理解し、見てとったとき、彼らは苦しい学校を卒業して、共産主義の自覚した味方となった。青年共産同盟はこういう経験をその全活動の基礎にしなければならない。

私は、われわれはなにをまなぶべきか、われわれは古い学校と古い科学からなにを取りいれなければならないか、という問題にこたえた。それをどうまなぶか、という問題にもこたえてみよう。すなわち、学校での活動の一步一步、教育、陶冶、学習の一步一步を、搾取者にたいするすべての勤労者の闘争と切りはなしえないように結びつけることによつてのみ、それをまなぶのである。

私は、共産主義のこの教育がどのようにすすめられなければならないかを、あれこれの青年組織の経験からとった若干の例によって、一目瞭然と諸君に説明しよう。みんなが文盲の一掃を論じている。諸君も知っているように文盲の国に共産主義社会を建設することはできない。ソヴェト権力が命令したり、党が一定のスローガンをあてたり、最良の活動家の一部をこの仕事に投じるだけでは、不十分である。このためには、若い世代自身がこの仕事に取りかかることが必要である。青年同盟にはいつている若人、青年男女が、これはわれわれの仕事だ、われわれは手をつないで文盲を一掃するため、われわれ青年層のあいだから文盲をなくすために農村に行こう、とかたるといふこと——ここに共産主義がある。われわれは、青年の自主活動をこの仕事にふりむけるために努力している。諸君も知っているように、ロシアを無知な文盲の国から教育ある国にすぐさま変えることはでき

ない。しかし、青年同盟がこの仕事に取りかかり、全青年がすべての人のために働くなら、40万の青年男女を結合しているこの同盟は、青年共産同盟の名に値いするものとなる。さらに、あれこれの知識を習得して、自力で文盲の暗やみから抜けられない青年を援助することが、同盟の任務である。青年同盟員であるということは、自分の活動、自分の力を共同の事業にささげるように仕事をすすめることである。これこそ、共産主義的教育である。このように活動を通じてこそはじめて、青年男女は真の共産主義者になるのである。彼らがこの活動で実地の成功をおさめることができるばあいにはじめて、彼らは共産主義者となるのである。

郊外の野菜畑での労働を例にとってみたまえ。これも仕事のひとつではないか？ これは青年共産同盟の任務の一つである。人々は飢えている。工場では飢えている。飢えからまぬかれるためには野菜畑を発展させなければならないが、農業は旧式のやり方で営まれている。そこで、もっと自覚した分子がこの仕事に取りかかることが必要となっている。そうすれば、野菜畑は拡大し、その面積はひろがり、成果は改善されることが、わかるだろう。青年共産同盟はこの仕事に積極的に参加しなければならない。各同盟あるいは同盟の各細胞は、この仕事を自分の仕事と考えなければならない。

青年共産同盟は突撃隊となり、あらゆる活動に援助をあたえ、その主動性、創意を発揮しなければならない。同盟は、どんな労働者でも、同盟員の説く学説はたぶん理解できないにせよ、また、おそらくすぐにはその学説を信じないにせよ、同盟員の現実の活動に照らし、彼らの行動に照らして、これは真に自分たちに正しい道をしめしてくれる人々だということを見てとるようなものでなければならない。

もし青年共産同盟があらゆる分野でこのようにその活動を組織することができないなら、それは、同盟が古いブルジョア的な道にまよいこみつがあることを意味する。われわれの教育は、共産主義の学説から出てくる任務を勤労者が解決するのをたすけるため、搾取者に反対する勤労者の闘争と結びつけられなければならない。」（『青年同盟の任務』全集第31巻P292～295）